

猪崎弥生・酒向治子・米谷淳編
『ダンスとジェンダー
多様性ある身体性』

竹田 恵子

映画、そして非常に良質なミュージカルにもなった『リトル・ダンサー』（原題：Billy Elliot）（2000年 イギリス）は、サッチャー政権下、危機に陥った英国の炭鉱町で、バレエダンサーを目指すピリーが主人公だ。父親はピリーにボクシングを習わせるが、ピリーは同じ体育館で行われていたバレエレッスンに魅せられてしまう。そこで田舎町の非常に男性的な父親は、息子がバレエを踊ることに猛反対するという場面がある。

このように、一般的にはいまだに「ダンスは女性」「スポーツ（とくに武道）は男性」のような二項対立的な価値観は根強いように思える。しかし、本書を読めば、そのようなイメージは教育現場において崩れつつあることが明らかになる。本書はダンス教育におけるジェンダーについて知るためには最適の書であろう。

戦後日本の体育教育の中で、長い間ダンスは主として女子生徒が履修するものと位置付けられていた（酒向）。さらに、「体育」は模範的な兵士養成のための科目であった。日本では制度上「体育」のなかに「ダンス」が含まれてきたため、女性の体育教師が「ダンス」科目を一手に担ってきたという背景もある。制度上、ダンスが男女共修・選択制となったのは1998年（平成元年）である。しかし、この時代は選択制であったため、教員はダンスを指導しなくてもよいこともあった。その後平成20年の学習指導要領改訂（文部科学省、2008）による体育の全領域必修化、ダンス男女必修化を受けて、新たなダンスの指導法の開発も急務となった。本書はこのような背景のもと、纏められたものである。

第1章ではまずダンスとジェンダーに関する先行研究を収集、動向が分析されている。ダンス教育におけるジェンダー研究は1990年代に急増したが、ダンスの必修化に伴いさらなる興隆が期待される。また男性の指導者もダンスの指導にあたる可能性も上がることから、変化の可能性もある。

第2章では、舞踊研究におけるジェンダーにおいてまとめられている。日本舞踊における身体表現について、猪崎・水村による舞踊運動評価尺度を用いた研究を援用しており、男性演じる女形のほうが、女性舞踊家よりも女性的な印象を与え得るという興味深い結果が得られている。

第3章、第4章では男女共修にて行うダンス授業における取組みが示されている。なかでも生徒がダンス授業経験を経てダンスに対する性差意識が減ったとする結果は、ダンスを通じた身体の高多様性を追求可能であるという点で希望が感じられる知見であった（中村）。さらに、男女共修に伴うダンス指導者不足を背景に、男性教師によるダンス指導の可能性を追求した木原の研究では「単元構造図」等を用いた授業実践において、指導経験のない教師が実践したはじめてのダンス授業においても、授業評価が高く、十分な学習効果が認められたことが判明している。

第5章では、教師自身の男女二項対立的ではない指導法や、トランスジェンダーを含むセクシュアル・マイノリティの生徒にどのような対応をするかといった実践レベルでの事例の紹介、提案がなされている。なかでも田中は、創作ダンスという実践を通して〈多様な身体〉という新しい認識が開かれる可能性を指摘している。

第6章では、ダンスの領域だからこそできる、性別二元論的ではない、多様な身体への目配りがなされる学習法がなされるべきである、と述べられる。

石井達郎の著作『異装のセクシュアリティ』（2003年、新宿書房）に示されるように、むしろ男女の二項対立的なイメージを攪乱する作品はすでに多く創作されている。筆者はジェンダー（およびセクシュアリティ）に関する教育が非常に重要であると考えている。ダンス領域にこそ、枠にはめるのではなく、多様なジェンダー、多様な身体性を称揚する教育を推進できるものとして、期待している。

最後に、「ジェンダー・フリー」という概念に関して、補足しておきたい。ジェンダー・フリーという概念は日本で誤解されて広まったが、男女の身体の差異を無視するというのではない。もちろん、人間の生物学的な身体のありかたは多様である、がしかし、男女の身体の（傾向としての）差異を細やかに考慮したうえで、個性に最適化した選択ができる、というような含意があろう。この点に関しても、指導法が開発されてきつつあることが示されている。

（2015年12月、一二三書房刊行）

徳丸吉彦監修 増野亜子編 『民族音楽学 12 の視点』

森 立子

本書は民族音楽学の入門書として編まれたものであるが、この学問の扱う問題領域やアプローチの方法について重要な論点がバランス良く集められた構成になっており、コンパクトな体裁ながらも充実した読後感を与える一冊となっている。また、民族音楽学のみならず、民族舞踊学に興味を持つ読者にとっても示唆に富む論考が多く含まれており——そもそも民族音楽学から、舞踊によりフォーカスした民族舞踊学が生まれてきたのであるから、このことはある種当然とも言えるのだが——、その意味で、舞踊学の領域においても基本文献の一つになりうる書であると言える。

全体は大きく四つの部分から構成されている（「響きと身体」、「伝承と政策」、「社会の中の音楽」、「総括」）。また、基本的事項の解説を目的とした七つのコラムが本文中に挟まれており、初学者にも配慮された作りになっている。

民族音楽学の誕生からこれまでの展開についての概観を得たい向きには、まず「総括」から読み進めることを勧めたい。この部分には、監修者でもある徳丸吉彦氏が「民族音楽学への流れ」と題する論考を寄せており、長年にわたりこの領域の第一線で研究活動を続けてきた徳丸氏であればこそ描きうる民族音楽学研究史の俯瞰図が示されている。

一方、とりわけ舞踊に深く関わるテーマを扱っているのが「響きと身体」の部分である。特に、この部分に含まれている以下の三編の論考は、舞踊学とも多くの問題意識を共有するものとなっている。

「音楽と身体」と題された増野亜子氏の論考は、筆者の専門であるインドネシア・バリ島のグンデル・ワヤンの具体的事例にも依拠しながら、「音楽するmusicking（クリストファー・スモールの造語）」身体がどのように形成されていくのか、その文化的・社会的側面について論じたものである。中心的な話題は、演奏家の音楽的身体の形成の問題であるが、この議論は、ダンサーの「舞踊する身体」の形成を規定する要素としてどのようなものがあるかを考える際にも有効な視点を提供していると言える。

「聴こえるものと見えるもの」と題された谷正人氏の論考も、記譜をめぐる問題の所在を非常に明快な形で整理して提示しており読み応えがある。イラン音楽を専門とする谷氏は、いわゆる西洋芸術音楽における五線譜記譜と、イラン音楽にお

ける五線譜記譜の慣習の差異にとまどった経験から、鳴り響く音と書かれたものとの関係や、楽譜を読む／書く行為について考えるようになったという。本論考では、「音を書きとどめる」行為の恣意性、記譜の方法が音楽聴に与える影響、「書き残す」行為によって強調される「楽譜の書き手の創造性」といった複数の重要な論点に関して考察が展開されている。

タイトルに「舞踊」が掲げられている金光真理子氏の論考「音楽と舞踊」は、民族舞踊学がこれまでに採用してきた様々なアプローチの方法について論じたものである。日本語の同種の論考、特に初学者にも手軽に読むことが出来るものは数少ないだけに、ここでこのテーマを採り上げて論じる意義は大きい。主にヨーロッパで自文化を対象に発展してきた民俗学的アプローチ、主にアメリカで他文化を対象に発展してきた文化人類学的アプローチ、ならびに、これまで多くの研究が採用してきた民族学的アプローチのそれぞれについて、簡潔ながらも要点を押さえた説明がなされている。

「響きと身体」にはさらにもう一編、梶丸岳氏による「音・声・ことば」という論考が含まれており、また「伝承と政策」、「社会の中の音楽」と題された部分に、合わせて七編の論考が寄せられている。本稿では紙幅の都合上これらすべてについて言及することは出来ないが、「それぞれの章はあなたの周りに広がる豊かな音楽の世界に向かって開く扉である」との編者の言葉どおり、一章また一章と本書を読み進めるうちに、音楽の世界——そしてそれと分かちがたく結びついている舞踊の世界——がいかにも広大で、またそれが喚起しうる知的可能性がいかにも多様なものであるのが、あらためて実感されるのではなからうか。

（音楽之友社、2016年4月刊）

公益社団法人日本照明家協会刊 『日本舞踊の照明』

小林 直弥

日本の伝統芸術における専門書は、能楽をはじめ、歌舞伎、文楽、そして日本舞踊にも様々な視点から解説されたものがあるが、本書は日本舞踊における研究書の中でもとりわけ照明に関し、作品ごとに明細な仕込み図やQシートにいたる詳しいデータを掲載し、日本舞踊を実際に舞台上演する際に全国の照明家がそのまま本書を参考資料として用いることのできる、今までの日本舞踊関連の専門書になかった趣向かつ実践技術を掲載した

専門書である。また、単に照明技術や手法を解説したものではなく、日本舞踊における理論、また歴史的背景や分類、音楽など項目毎に明細な解説を掲載している。

本書に掲載された日本舞踊作品は全53作品。今まで日本照明家協会の発行する『日本照明家協会雑誌』の1994年3月号から2009年5月号まで、15年間78回にわたり掲載された特集頁「日本舞踊の照明」を再構成し、さらに日本舞踊に関する多方面からの専門的知識を得るための解説に加え、用語解説から日本舞踊の照明に関する書籍の紹介や、多くの写真や図版を用いてより理解しやすい構成となっている。

まず本書の特徴でもある、各日本舞踊作品の照明解説頁『日本舞踊の照明』では、「解題」「舞台装置」「照明」「照明進行」(CUEきっかけ付き)に関しそれぞれ項目ごとに、歌詞はもちろん、所作台や照明装置の詳細までが詳しく解説されている。また各項目には、舞台装置図がカラー掲載され、常式の舞台装置まで理解できるように構成されているなど、照明プランからオペレートに至るまで直ぐに活用できるような詳しい説明も画期的な掲載内容と言えよう。とりわけ、各舞踊曲の歌詞には古典舞踊作品における漢字の解説に配慮し、多くのふりがなが追記されているほか、Qシートにも各場所、機材名や個数、また歌詞付の進行が掲載されているのも実際に使用することを想定したものとなっている。また、本書の特徴として、舞台照明家のみならず舞踊家自身、さらに誰もが日本舞踊について理解が深まるような、日本舞踊における様々な視点からの解説も本書の魅力である。掲載されている項目では、「日本舞踊の美」(丸茂祐佳)をはじめ、「日本舞踊略史」(古井戸秀夫)、「近代の日本舞踊とテクノロジー」(神山彰)、「日本舞踊照明攷」(北寄崎嵩)、「日本舞踊の流派」(城後一朗)、「日本舞踊の種類」(小林直弥)、「日本舞踊の柢」(増田一雄)、「日本舞踊の伴奏音楽」(丸茂祐佳)によるそれぞれ専門分野からの詳しい解説がなされ、本書は舞台上演における実践的な専門書としても大いに活用できる内容が盛り込まれている点、また日本舞踊における照明や舞台美術、音楽や作品解説を含め、研究書としても大いに活用が期待される一冊である。

(公益社団法人日本照明家協会
2015年12月10日刊行)